

「浙江大学スプリングスクール参加報告書」

京都大学農学部1年 (作田 淳弥)

今回の派遣は私にとって初めての中国訪問の機会となるもので、今までアメリカとオーストラリアといった日本と同じがより発展した地域にしか言ったことがなかった私にとっては、中国という場所はいろいろと気が付かされるが多かった。特に今回訪れた杭州という場所は人口が600万人ながら、中国国内では発展の過渡期にある場所であり、高層ビルの建築が街のいたるところで進んでいるさまや地下鉄建設が急ピッチで行われているさまは未来に期待を寄せさせるものであり、経済成長が成熟しきって衰えを待つばかりの日本とは違い活気があり新鮮だった。

プログラムの主眼は中国語の習得であったが、地元の人と話す生きた中国語は、普段の座学とは異なり発見も多かった。最も自分が満足し得る段階にまで中国語を延ばすことはできなかったが、その分話せない悔しさと中国語の必要性を再確認させられ、帰国後の中国語勉強法を考える良い契機となった。実のところカリキュラムでは中国語はこれ以上いらぬことになっているが、それでも独学で勉強を継続していきたいと思えたのは今回のプログラムあってこそだと思う。ぜひ次に中国に行く際には「你听不懂。」と笑われることのないようにしておきたいものだ。

中国で学んだことは何も言語への悔しさだけではない。電子マネーについてはそのよい例の一つだ。中国ではAlipayやWeChat Payといったスマートフォン上のQRコード決済がさかんであり、どんなに小さな小売店であってもこの支払方法に対応しているため学生などは特に財布を持っていないことも少なくなかった。ひるがえって自分の財布を見てみると人民元がパンパンに詰め込まれ、そのうえ大量のポイントカードにクレジットカード、キャッシュカード、PiTaPaそして免許証・学生証ととてつもなく膨れ上がった財布が見て取れた。確かに中国は日本に比べて後進な国かもしれないが、少なくともE-moneyに関してははるかに進んでいる。成熟しきっていないからこそ、最初から最先端の技術を入れられるし、政府が舵を切りやすい政治システムもこれに寄与しているに違いない。後期高齢化社会にあり衰退していくであろう日本の一国民の目からみてこれは脅威でしかなく、改めてこれから私が放り出されていく社会の過酷さを痛感させられた。こうした状況を目の当たりにし、国際競争力を身に着ける重要性にツウいて再確認できた。国際競争力を身に着けるには間違いなく、世界トップレベルの知識を身に着けるべく勉学に励まねばならないだろう。英語はもちろんのこと中国語のスキルもブラッシュアップする必要もある。また今回のように海外に行き肌で感じていくことの大切さを知った。

世界遺産 西湖を有する風光明媚な街、杭州で過ごした二週間が私にもたらしたものは何も中国語に関連することだけにとどまらず、今後の人生を歩む上で重要な勉学の大切や異文化に触れることの大切さなど計り知れないものであった。ぜひこの機会を無駄にすることなく、今後の豊かな人生への起爆剤としたい。